

# ペンシルヴェニア版 『シスター・キャリー』について

村山 淳彦

ペンシルヴェニア版『シスター・キャリー』<sup>(1)</sup>とは、1981年ペンシルヴェニア大学出版局が刊行した、この小説の新版をいう。当時ペンシルヴェニア大学に客員として籍をおいていた私は、大学全体が一種の興奮をもってこの出版を迎える様子を目のあたりにした。大学内の購売部にこの本が大量に平積みされ、大学新聞は大きな紙面を割いてその刊行を報道した。それは一般新聞紙上でもあつかわれ、学界や文学界での事件であるだけでなく、社会的事件でもあるらしかった。この本の監修者ネーダ・ウェストレーク博士は、大学図書館最上階にある稀覯本室のキュレーターをつとめる老婦人で、興奮を抑えながらも誇りにみちた口調で、出版の喜びを私に語ってくれた。彼女は、このセクションにある有名なドライサー・コレクションの守護神のような人物で、私がそこの莫大な資料の山のなかから少しずつ手紙などを借り出しては、ドライサーの判読しにくい文字と格闘するために通っていた日々、いつもこの本のゲラを抱えて校正にいそんでいたものである。

ペンシルヴェニア版とは、セオドア・ドライサーの処女作でその後数々の論争と伝説を産み出したあの小説を、初版後八十年経ってから初めてその真の姿に復元したと称する刊本である。ウェストレークの「序文」によれば、その経緯は次のようになる。

ドライサーの妻と彼の友人アーサー・ヘ

ンリーは、手稿とタイプ稿を部分的に削除したり、改訂したりした。タイピストや出版社編集員が、一層の変更を加えた。1900年11月に出版された『シスター・キャリー』は、編集段階におけるこの種の干渉や検閲によって損われたにもかかわらず、今日にいたるまで、それがアメリカの他の版や外国の翻訳版の底本となってきたのである。ペンシルヴェニア版『シスター・キャリー』の編集者一同は、手稿やタイプ稿を頼りにして、この小説を著者が最初に書いた原作にできるだけ近い形に復元している。すなわち一層暗く、救いのない芸術作品へもどしている。(p. ix)

ペンシルヴェニア大学出版局から出版されたことにより、編集者たち自身によってペンシルヴェニア版と名づけられたこの本は、『シスター・キャリー』「無削除版」のテキストだけでなく、200ページ近くにおよぶ「評釈」や「本文比較研究資料」を含んでいる。それは、現代アメリカ文学研究における本文批評の実際を知るのに、一冊だけでもその水準をうかがいうる書物として、ごく興味深いものである。しかしドライサー研究者にとってまず何よりも関心をかきたてられるのは、復元された原作と主張されるこの新しいテキストと、これまでわれわれが真正のものと思いついて読んできたテキストとの差異がどのようなものか、という問題である。

この差異は、量的には決して小さくない。異文のなかでもっとも大きな部分を占めるのは、妻ジャグやヘンリーが示唆し、ドライサーが受け入れた削除によるものであるから、おのずとペンシルヴェニア版にあって1900年版にはない異文が大部分で、その逆の例はわずかである。ドライサーはメンケン宛ての手紙で、この種の削除が4万語にのぼったと述べているが、ペンシルヴェニア版の本文校訂をしたジェームズ・ウェスト三世の調査によれば、ドライサーのこの見積りはかなり正確で、タイプ稿から削除されたのはほぼ3万6千語であった (cf. p. 538)。これは、ペンシルヴェニア版で大雑把に計算して20万語余りと見られる作品に占める語数としては、少ないとは言えまい。新たに復元された本文とは、まず何よりもこの3万6千語のことである。

だが復元された「原作」が真正の『シスター・キャリー』であると言えるかどうかという点に関しては、事柄はそれほど単純ではない。ウェスト三世は、テキスト編纂上の原則を説明して、「ペンシルヴェニア版『シスター・キャリー』は、現代の学問的原文編纂原則に従って確立された」(p. 577)と述べているが、ここで「原文(コピー・テキスト)」として選ばれているのは、ドライサーが最初に書いた手稿である。この手稿だけが「ほとんど完全にドライサーの自由に左右できたテキスト」(p. 578)であり、これに後から加えられた削除変更はほとんどすべて外部からの干渉ないし検閲であるとみなされる。しかしそのような見方は、ドライサーの小説創作方法を根本から否定することになりはすまいかという疑義をよぶ。

ドライサーは小説を書くにあたって、まず手書き原稿を作り、それをタイピストに渡して浄書タイプ稿を作らせ、そのタイプ稿を身近の複数の人びとに読ませて「編集」させ、

彼らの意見を取捨選択することにより、自分の最終的判断を下して決定稿を作るという方法をとった。『シスター・キャリー』のみならず、彼のすべての小説がこの方法によって仕上げられている。つまり彼の最初の手稿がそのまま刊本になった例は皆無なのである。それなのに、なぜ『シスター・キャリー』についてだけは手稿を原文にしなければならないのであろうか。

もちろん刊本たるペンシルヴェニア版のテキストは、手稿そのままではない。当然編集者による校訂がほどこされている。その校訂により手稿とペンシルヴェニア版とのあいだに生じた異同の箇所と、校訂の根拠は、巻末の「本文比較研究資料」に明示されている。校訂の基準は、原作者が最終的によしと判断したテキストの再現にある。ペンシルヴェニア版の場合は、手稿を土台にして、その後に加えられた削除改訂のうち、純粹に原作者の芸術的判断にもとづくのみなされるものだけを組みこんだ本文が目ざされている。そこには当然校訂者の判断が入る。たとえばドライサーの筆跡と認められる削除改訂であっても、それが他者の強要や状況への追従の結果とみなされる場合は、校訂にはとりいれられない。したがって、ドライサーの筆跡による改訂を定本に組みこむかどうかは、それほど恣意的に決められているわけではないけれども、窮極的には校訂者の美的判断にもとづいている。それでもペンシルヴェニア版は、他者が加筆した絵具を洗い落した結果ようやくわれわれの目にその真のかたちをあらわした名匠の絵画のように、まことの『シスター・キャリー』であると考えることができるだろうか。

ところでペンシルヴェニア版は、「流布本」とどのようにちがっているだろうか。この比較はなかなか手間がかかる。ペンシルヴェニア版の巻末には、「アーサー・ヘンリーによってしるしを付けられ、ドライサーによって

受け入れられた大幅削除箇所」の一覧表 (pp. 661—9) がある、流布本との異同を部分的に知る手がかりが与えられるが、この一覧表も完全なものからは程遠い。かと言ってその完全な一覧表の作製をもくろんだり、提案したりするつもりは、私には毛頭ない。ただ、今日私たちが手にすることのできる『シスター・キャリー』の二種類の刊本を一通り比較してみた結果、気づいたことについて若干述べてみたい。(2)

流布本とペンシルヴェニア版とを比較してみても目につくのは、その結末のちがいであろう。ペンシルヴェニア版の結末はハーストウッド自殺の場面である。流布本ではこの自殺の場面の後に、キャリーのそれまでたどってきた人生を総括し、ついにはキャリーに作者が直接呼びかける体の、コーダのような文章がある。この結末のちがいは、ペンシルヴェニア版が出る以前から諸家の研究により広く知られていたが、今やペンシルヴェニア版によってその全貌が明らかになったわけである。おまけにペンシルヴェニア版は、最終章結末部分を新たに書き加えたドライサー自筆原稿と妻ジャグによるその浄書とを収録していて、結末が手稿から流布本までどのような段階をたどって変っていったかを推定するための材料を提供している。ここには本文校訂全体にかかわる原則上の問題が、凝縮した形であらわれているとも見られる。

この点についてペンシルヴェニア版編集者たちは、次のように言う。

ドライサーは小説の結末をなぜこれほど極端に変えたのか。すでに書きあげたものになぜ不満を覚えたのか。書き直そうときめたのは彼だったのか。それとも誰か他の人へ書き直すように説得されたのか。新証拠でも出てこないかぎり、上の疑問に対する決定的な答が出ることはあるまい。(p.

518)

にもかかわらず結局のところ編者たちは、ドライサーが結末を書き直したのは「誰か他の人に……説得された」ためと結論し、ハーストウッド自殺の場面を結末とする手稿版を定本に取り入れた。そこには次のような美的判断が介在している。

この結末は、1900年版のあいまいな結末よりも暗く、哲学的に決定論の色彩がより強い。しかしそれは、復元されたテキストの結末として自然であり、ふさわしい。作品には、人間の条件についてドライサーが抱いていた決定論的な見方が一貫して反映しているからである。『シスター・キャリー』が削除され、検閲され、損われてさえも、批評家や読者を三世代にわたって引きつけるだけの力を残していたことは、ドライサーの独創的構想に対する賛辞となる。だがここに初めて提示された、その浄化された形で、『シスター・キャリー』は一層つりあいのとれた迫力のある小説として光彩を放ち、今世紀アメリカの大作家のひとりによる、ますます悲劇的な芸術作品として新たな光をあびるのである。(p. 535)

つまり編者たちには、『シスター・キャリー』は「悲劇的な芸術作品」としてすぐれているという評価が根底にあり、ハーストウッド自殺の場面を結末にする方が、その評価をもっと確実にしうという判断がある。

だが、ハーストウッド自殺の場面を結末にしたからといってこの作品の悲劇性のあいまいさが完全に解消するわけではないし、逆に流布本の結末を採用したからといってこの作品にもともと潜在していた悲劇性が完全におおい隠されるというわけでもない。このように見ると、結末の異同の意義はかなり相対的なものにとどまるのではないかと、いう

疑問が残る。それでもあえて手稿版の結末にこだわるところにペンシルヴェニア版の特徴がある。

ペンシルヴェニア版ではじめて復元された手稿の削除部分の他の箇所についても、大なり小なり同様のことが言える。長大な削除部分の大多数は、ドライサー小説特有のものとして悪名高い「哲学談議（フィロソファイング）」や、作中人物の行動や思考に対する作家の解釈を述べるくだりである。それらの箇所は、明示された作者の思想によって『シスター・キャリー』解釈を補強するには有益な材料ではあっても、削除によって小説の根本的性格にまで変化をおよぼすほどのものではない。削除がほんとうに惜しまれる箇所は、意外に少ないのである。

たとえばハーストウッドが妻から離婚を請求されて苦境に立つくだりで、「ある種の明白な事実と直面したときには思索にふけても甲斐がないということは、しばしば人生の滑稽な側面をあらわすことになる」（p. 240）という文ではじまる一節が削除されている。そこには、人間の理知が状況を変革する力に欠けているというドライサーの考え方があらわされていて、彼の小説にそのような状況を描いた場面が豊かに含まれていることが決して偶然の結果でなく、作者の自覚的な人生観察の成果であったことが示されている。この一節はそのことを確認させてくれるが、これがなくてもここで述べられているような場面が流布本に含まれている事実には変わりはない。

また、ハーストウッドとの逢引きが発覚してドルーエに捨てられたと思ったキャリーが、自活の道を求めて職をさがすくだりで、彼女が美人であることに目をつけて雇おうとする男に嫌悪を覚えるということを述べた箇所が削除されている。そこには「容姿端麗、眉目秀麗ということが、こういう連中にとって大事であるということは明白だった。……

しかし彼女は、このような男にははなもひっかけまいと決心したものの、自分の生活の資がこの種の恩恵に浴することで得られるかもしれないと考えると、悲しくなった」（pp. 256—7）という文章も含まれる。この一節は、キャリーの「墮落」を弁護しようとする他の削除部分と同種のものともみなしうが、女性の間らしい自活や自立を阻むセクシスト社会に対する批判としても興味深い。しかしこの種のフェミニストの視点とも言うべき立場からの叙述は、削除されずに流布本に残った他の箇所にもあるので、この部分の削除によって『シスター・キャリー』からフェミニズムの色彩がすべて消えたわけではない。

上に述べた箇所が削除された理由は、それが求職にきた若い女性に対する求人側の男のみだらな欲望を描いていることにあったかもしれない。削除改訂の少なからぬ部分が、当時のヴィクトリア朝式ジェンティリーズムへの顧慮に由来することは明らかである。会話からさえも俗語卑語の類が取り払われ、性的な事柄への言及が消し去られた。たとえばハーストウッドがキャリーを誘拐するようにしてモントリオールへ墮落する車中の場面で、キャリーが説得されて彼に同行するのを承諾するとき、「もしもこの人を頼らなければ——この人の愛を受け入れなければ、彼女は他にどこへ行ったらよいというのか」（p. 293）という、生活の必要に迫られたあげくの同意であることを強調する文章がある。それは流布本にも残っている文であるが、削除されているのはその次の、「肉欲もまたそれなりの主張をする」という一文である。これが削除されたことによって、キャリーがハーストウッドと生活を共にするようになった動機に性欲もかかわっていたことは、はっきりあらわされなくなった。この種の削除は、たとえそれがドライサー自身の手によるものであろうとも、性的な事柄に対する当時の禁忌を反映し

た、まぎれもない検閲の結果であり、それらの復元は、ペンシルヴェニア版が作者の意図したテキストであると自称するための最良の根拠だろう。

手稿では、キャリーだけでなく、ドルーエやハーストウッドも性欲を有する人間として直截に描かれていたし、もっとも注目すべきことに、エームズもキャリーの「美しさに大きく目を開かれた」(p. 487) 思いを抱いたと描かれて、キャリーの性的魅力にとらえられた男性としてあらわされている。また手稿では、ハーストウッドがキャリーの要求に応じて偽名による結婚式をあげるのは、二人がはじめて肉体関係を結んだ翌朝となっているのだが、流布本では、それが結婚式をあげた後に肉体関係を結んだという筋書きに変わっている。手稿やタイプ稿とつきあわせてみれば、この改変がゲラ校正の段階でおこなわれたことは明らかであるが、ゲラは今日残っていないので、誰の手で変えられたかは不明である。ペンシルヴェニア版編集者たちは、これをほとんど確実に出版社の手による検閲とみなせるものの例としている (cf. p. 528)。

ペンシルヴェニア版の編集者たちが述べているように、「この新しい『シスター・キャリー』における主要登場人物は、みんなかつてよりも複雑になっている。つまりより人間的に描かれている」(p. 534)。しかし、「ペンシルヴェニア版『シスター・キャリー』は、この小説の新しい版という域をはるかに越えている。それは事実上、これまで知られていなかった新しい芸術作品であり、新しい目で見直され、新たな解釈をほどこされなければならないものである」(p. 532) というのは、いささか言い過ぎである。この版の書評を書いたドナルド・バイザーは、「新しいテキストの作成者たちとしては多分不可避なことであろうが、ペンシルヴェニア版の編集者たちは、自分たちの版でとりかえたいと望んでい

る旧版を過小評価するとともに、自分たちの版を過大評価してしまった」<sup>(3)</sup> と言っている。

バイザーはペンシルヴェニア版の価値を大いに疑問視している。しかし、「削除された文章の大部分は、この小説の改訂について宣伝広告文や新聞報道で言われてきたこととは異なり、哲学的注釈やあからさまな性的言及の文章ではなく、繰りかえしにすぎなかったり、筋の展開を妨げたり、場違いであったりする部分なので、どんな編集者も削除するように指示したかもしれない類の文章である」(p. 735) というのは、やはり言い過ぎではないだろうか。復元された部分には、先にも述べたように、作品解釈にとって重要な社会批判や人間観察を述べる作者のコメントも含まれているし、性的な事柄への直截な言及もあるからである。

バイザーがペンシルヴェニア版の価値を認めているのは、次のような点にかぎられるらしい。

ペンシルヴェニア版と1900年版とのあいだの比較的小きな異同のいくつかは、完全に首肯できる有益なものであり、『シスター・キャリー』の将来の版には是非とりこまれるべきものである。この種のものには、タイプ稿にまぎれこんでいた誤りの訂正、ダブルデー＝ページ社によって検閲削除された固有名詞や卑語俗語の復元、それに章題の省略がある。(p. 735)

バイザーの評価は、「将来の版」に言及していることから察しられるように、「ドライサーの最初の小説として、また、アメリカ小説史上画期的な作品として、われわれが読み、研究すべきテキスト」(p. 737) という観点から下されている。これは、ペンシルヴェニア版が流布本にとってかわるべきテキストとして宣伝され、編集者たちもそう主張していることに対して、バイザーがほとんど自動的

に反発した結果選ぶ羽目になった観点であろう。

バイザーの反発は、ペンシルヴェニア版編集者たちのだいそれた主張のためだけではない。市場への影響力が大きいペンギン・ブックスが、はじめてドライサーの作品をそのリストに加えて『シスター・キャリー』を出版したとき、<sup>(4)</sup> そのテキストにペンシルヴェニア版の写真オフセットを用いた（したがってページ数まで同じである）ので、今後『シスター・キャリー』とはペンシルヴェニア版のことであるとされかねない雰囲気まで出てきたからでもあろう。また事実、最新のドライサー評伝では、『シスター・キャリー』論のテキストとしてペンシルヴェニア版が用いられ、早くもこの作品の標準的テキストの地位が交替したかのようなあつかいが示されている。<sup>(5)</sup> こうなると、『シスター・キャリー』として今後読まれていくべきテキストは何であるべきかという、きわめて論争的な問題が浮かび上がり、たとえば邦訳の際にはどちらを底本として用いるべきかということについて議論が生じうる。

私の結論を言えば、ペンシルヴェニア版は学問上の重要な資料とみなされるべきであると考える。あえて『シスター・キャリー』の理想的なテキストを言うならば、それは1900年版とペンシルヴェニア版とのあいだのどこか中間に位置するものではないかと思われる。しかし、理想的なテキストを編纂しようなどという考えそのものが、もともと反歴史的な企てであるのかもしれない。もちろん誤植の訂正や、句読点の整理（たとえばペンシルヴェニア版387ページ、および388ページで、自由間接話法の箇所から、これまでどの版にも見られた引用符が取り除かれているのは、ドライサーの自由間接話法の使用を正しく評価するために意義のある改善点である）など、1900年版から編集印刷上の誤りを除去した

テキストは望ましい。しかし作品の形そのものは、バイザーの言うとおり、1900年版を歴史的な所与として受けとめるべきであろう。

元来一字一句にあまりこだわらず、手稿が印刷出版されるまでのあいだにさまざまな人びとによって手を加えられることに慣れてきた、ジャーナリストらしい感覚の持ち主であるドライサーは、テキストの生産がすぐれて社会的物質的な過程であることを事実として認めていたように思われる。他者によるテキストの改変一切を外部からの干渉とみなし、著作家の完全な自律を死守しようとする純粋主義とは、ドライサーは無縁であった。だからペンシルヴェニア版も、それが他者の手が加えられる以前の、ドライサーの芸術家としての自律的な著作活動の産物を忠実に再現したものであることを根拠にして、理想的テキストであると主張するわけにはいかない。むしろそれは、ドライサー研究にとってきわめて興味深く、貴重な労作として、また、テキストの生産過程を解明した事例研究でありつつ、生産過程にあるテキストそのものとして、評価されるべきであろう。

## 注

1. Theodore Dreiser, *Sister Carrie: The Pennsylvania Edition*, Neda M. Westlake, General Editor; John C. Berkey and Alice M. Winters, Historical Editors; James L. W. West, III, Textual Editor (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1981). 本稿におけるこの本からの引用は、引用文末尾にカッコで囲んだ数字によって、出典箇所のページを示す。
2. 一橋大学における1984年度の私のセミナーに参加して、『シスター・キャリー』の1900年版とペンシルヴェニア版とのあいだの異同の調査という面倒な作

業につきあってくれた学生諸君に、感謝の意を表したい。

3. Donald Pizer, "Sister Carrie. By Theodore Dreiser. The Pennsylvania Edition," "Book Reviews," *American Literature*, Vol. 53, No. 4 (Jan., 1982), p. 736. 以下この書評からの引用も、前注で示したのと同じ方法によって出典箇所を示す。同じ方法をとることによって生じる混同はないであろう。
4. Theodore Dreiser, *Sister Carrie: The Unexpurgated Edition* (Harmondsworth: Penguin Books Ltd., 1981).
5. Lawrence E. Hussman, Jr., *Dreiser and His Fiction* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1983).